日本科学者会議

福岡支部ニュース

2013 年 2 月 20 日発行　No. 218

●日本科学者会議事務局

〒113-0034　東京都文京区湯島 1-9-15
Tel:（03）3812-1472

●福岡支部事務局

事務局長　小早川義尚
〒812-8581　福岡市東区箱崎 6-10-1
九州大学大学院理学研究院生物科学部門
Tel:（092）642-3901　Fax:（092）642-3901
E-mail: kbykwrcb@kyushu-u.org
郵便振替　福岡 01790-1-5576
支部 HP　http://jsa-t.jp/local/fukuoka/

目次

１．日本科学者会議第 43 回福岡支部総会（定期大会）の御案内　1
２．日本科学者会議「第 20 回総合学術研究集会」の御案内　1
３．＜3.11＞２周年原発シンポジウムの御案内　2
４．JSA 福岡支部ホームページ読み物（第 43 話）　2
５．「日本の科学者」読書会報告　3
６．例会等の御案内　4

１．日本科学者会議第 43 回福岡支部総会（定期大会）の御案内

福岡支部の定期大会は例年通り５月に開催されます。日程と会場は下記のとおりです。会員の皆様には、予定を空けておいていただければ幸いです。大会後に開催される講演会、委任の取り扱い等の詳しい内容は決まり次第皆様にお知らせします。

日　　時：　５月１２日（日曜日）午後２時～
場　　所：　久留米大学福岡サテライト（天神エルガーラ６階）（裏面地図参照）

２．日本科学者会議「第 20 回総合学術研究集会」の御案内

日本科学者会議の学会大会とも言える「総合学術研究集会（総学)」は、次回で 20 回目を迎えます。その開催は、九州地方区が担当することになっています。すでに、20 総学の日程と会場は下記の通り内定しています。実際の総学は 1 年半後に行われますが、それに向けた準備（実行委員会)、プレシンポ（2013 年度の九州地方区シンポ：大分）などが来年度早々から取り組まれます。その始まりとして、この 4 月に第 1 回の「20 総学実行委員会の事務局会議」を開く予定になっています。20 総学成功に向けて、福岡支部の JSA 会員の皆様のお力添えをお願いします。

第 20 回総合学術研究集会
日　　時：　2014 年 9 月 12 日（金）～9 月 14 日（日)、予備日 15 日（月）
会　　場：　西南学院大学　福岡市早良区西新（福岡市営地下鉄西新駅下車、徒歩 5 分）

３．＜3.11＞２周年原発シンポジウムの御案内

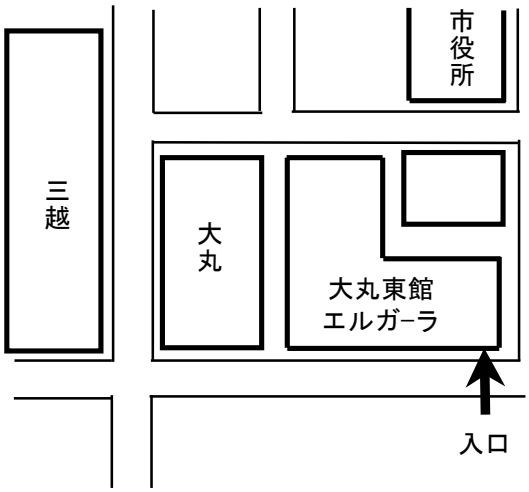
＜3.11＞２周年原発シンポジウム

原発ゼロ社会をめざして

私たち日本国民は、東北地方太平洋沖地震に端を発した福島第一原発事故からまもなく２周年を迎えます。この事故は、原発事故はいとも簡単に起きること、そして、地震国日本には安全な原発はそもそも存在しないということを私たちに教えてくれました。現在でも 16 万人におよぶ人々が避難生活を余儀なくされているだけでなく、年間の被ばく線量が数ミリシーベルトに及ぶような地域に残り生活されている人々もいます。このようなかたちで放射能汚染による被害は現在でも進行しています。原発事故が起こした問題の多くは未解決のままです。

事故から２周年を迎えるにあたって、今回のシンポジウムでは、低線量被ばく、内部被ばくによる健康影響についてどのように考えればよいのか、原発を監視する役割を持っている原子力規制委員会はどうあるべきなのか、また、原発ゼロ社会をめざすうえで玄海訴訟はどの程度有効なのか、などについて第一線で活躍されているそれぞれの専門家の講演を聴き、認識を深めるシンポジウムを企画しました。このようなことに関心をお持ちの皆様の多数のご来場を期待します。ただし，会場の広さの制限から、先着 90 名までに限らせていただきます。

日　時：　2013 年 3 月 3 日（日曜日）開場 13:30　開始 14:00　終了 17:00
場　所：　久留米大学 福岡サテライト（大丸東館エルガーラ 6F，下図参照）
内　容：（１）高岡　滋（神経内科リハビリテーション協立クリニック，医師）
「低線量被曝、内部被曝による健康影響」
（２）吉岡　斉（九州大学教授，副学長）
「難航する原子力安全規制改革」
（３）近藤恭典（福岡第一法律事務所、弁護士）
「玄海訴訟について」
（４）質疑討論
参加費：無料
事前の参加申込は不要です



主　催：　日本科学者会議福岡支部
共　催：　「原発なくそう！九州玄海訴訟」弁護団

連絡先：　小早川義尚　九州大学大学院理学研究院
電　話：　092-642-3901
メール：　kbykwrcb@kyushu-u.org

４．JSA 福岡支部ホームページ読み物（第 43 話）

『通販生活』が面白い

『通販生活』という雑誌をご存じだろうか．一年に春号，夏号および秋冬号の３冊が発行されている．商品の通信販売を目的にした冊子であるが，けっこうハードな話題を取り上げており真面目な雑誌のようである．例えば，2011 年秋冬号では特集「脱原発時代の暖かい暮らし」を組んで，民主主義の問題として脱原発の論陣を張った．2012 年の夏号では，「46 年ぶりにやってきた原発のない夏」（2012 年 5 月発行）を特集して，再稼働をねらっていた大飯原発周辺の断層を問題にするとともに，放射能に苦しむ福島の母子をなおざりにして原発再稼働に熱心なこの国のおかしさを糾弾している．

この雑誌は３つの「忘れない」を読者にアピールしているという．商品注文を忘れないが第１の「忘れない」であり，通信販売を目的にした雑誌ではこれは当たり前である．後の２つの「忘れない」は，「福島」と「沖縄」である．「福島を忘れない」という姿勢は，上にあげた特集からも推察される通りである．「沖

縄」については発売されたばかりの 2013 年春号に取り上げられている．

考えてみれば，「福島」も「沖縄」も日本がかかえる政治問題の中で，最も厳しいかたちで矛盾があらわになっている問題である．このような鋭い矛盾のある政治課題を正面から取り上げる『通販生活』を応援したくなってしまう．2013 年春号には，落合恵子氏と山田洋次監督の対談もあり，これも面白い．近日中に公開される最新作「東京家族」に関連して，映画作りの裏話や 3.11 あるいは原発事故との関連が語られている．

『通販生活』の定価は，毎号 180 円．わが家では，2011 年秋冬号を書店で買って来て，興味深く読ませてもらった．その号に紹介されていた商品を家内が購入して以来，連続して４号（2012 年春，夏，秋冬および 2013 年春）がただで郵送されている．

（2013.1.9/E.M.）

５．「日本の科学者」読書会報告

◆1 月号読書会　＜特集＞国際原子力ムラーその虚像と実像　1 月 14 日（月）午後 2 時～5 時

以下は読書会で報告されたレジュメをもとに「日本の科学者」1 月号の読書会の様子を編集したものです．

髙橋博子著「冷戦下における放射線人体影響の研究 ― マンハッタン計画・米原子力委員会・ABCC」

1958 年の国連科学委員会（UNSCEAR）の報告では，ストロンチウム 90 の人体への集積を通して，その影響が５歳以下の子どもや胎児に対して特に大きいことが指摘されていた．しかし，このような指摘は現在の国際原子力ムラの「国際的科学的知見」には反映されていない．米原子力委員会や国際原子力機関（IAEA），UNSCEAR，国際放射線防護委員会（ICRP）などが互いに協力して形成されてきた国際原子力ムラは，核開発や原子力発電の推進という立場の利害を守るため，放射線の影響を過小評価する「国際的科学的知見」を徹底して浸透させた．福島第１原発事故を経験し，核を守るための科学から脱却し，とりわけ弱い存在である胎児や子どもたちへの放射線の人体影響を，人間を守るための研究に根本から作り直す必要がある．筆者は，その点で自らも参加する「市民と科学者の内部被曝問題研究会」に期待を寄せている．（報告：T.Y.）

Y.ルノワール著「国際原子力ムラ ― その成立の歴史と放射線防護の実態」

福島第一原発の過酷事故において，チェルノブイリ事故の教訓は，住民の防護のために生かされるどころか，放射線の被害をより徹底して否定するために利用されている．国際放射線防護委員会（ICRP）などの国際機関は，原子力産業の発展を維持するために支援をしている：広島と長崎の惨事に対して，内部被ばくについての考慮が無視された．チェルノブイリでは，事実を隠蔽する役割を果たした．チェルノブイリ事故の被害を認めなかった張本人たちが，いま福島で跋扈している．チェルノブイリ事故から何年も後になって，旧ソ連の医療組織が行った数々の科学的研究結果が取りまとめられ，”Chernobyl: Consequences of the Catastrophe for People and the Environment”(2006)としてロシアのナウカ出版から出されたが，この本に引用された論文は原子力マフィアから排斥されたばかりか，これらの論文の著者の多くは厳しい弾圧（降格，投獄，あるいはテロ）にあったという．いま，福島で活躍しているミハイル・バロノフや山下俊一氏は紛れもない原子力マフィアの古株であると著者は指摘する．（報告：K.C.）

W.チェルトコフ著「チェルノブイリの犯罪 ― フクシマにとっての一つのモデル」

著者は，1990 年から 2010 年までの間にチェルノブイリを８回現地取材した元スイス国営放送のジャーナリストである．ヨーロッパの原子力ロビーと公的医学界は，チェルノブイリ事故によって汚染された広大な大地という実験場で数百万人の人間をモルモットにして，新たな疾患の実験を進めることを四半世紀にわたって意図的に強いているという．ここでは，特に，ベラルーシで実施された「エートス・プロジェクト」の犯罪性を告発している．このプロジェクトは，フランスで原子力過酷事故が起きたとき，事故後の管理に役立つデータを収集することを目的で行われた．安定した科学情報を得るために，体内の放射性セシウムの吸着剤の投与を拒否したために，子どもたちの体内に蓄積された放射性セシウムの量は変わらなかったという．このプロジェクトに関与したフランス人教授は，「私の研究室ではこのような実験には従事できなかっただろう．それをいま，こうして観察できているのだ」と言ったという．著者は，同じことが福島で行われようとしていると警告している．（報告：M.K.）

A.R.カッツ著「チェルノブイリの健康被害 ― 国際原子力ムラの似非科学 vs 独立系科学」

ニューヨーク科学アカデミーが独立系研究者による研究報告を集めたチェルノブイリに関する本”Chernobyl: Consequences of the Catastrophe for People and the Environment (2009)”を出版した（日本語訳が進

行中であるが，英文版の pdf ファイルはネット上で入手可能）．この本にある報告を参考にしてみれば，国際原子力機関（IAEA）の報告（2005 年最終報告者「チェルノブイリの遺産」）がチェルノブイリ事故の被害を小さく見積もり，さらに「チェルノブイリによる影響では，メンタル的な健康被害が最大の公衆衛生の問題」，「放射線被ばくの健康への危険性が大げさに感じられている」などとチェルノブイリ犠牲者に似非科学の攻撃を加えていることは明らかである．この報告集は，英文で 300 ページを超えるものであるが，私たちにとって必読書になるものと思われる．（報告：Y.M.）

松崎道幸著「ガンリスクは 10 ミリシーベルトでも有意に増加 ― 日本の原発労働者の疫学調査が ICRP のリスク評価の見直しを迫る」

日本政府は 1990 年から「原子力発電施設等放射線業務従事者等に係わる疫学調査」を継続しており，5 年ごとに行われる調査の報告書が 2010 年 3 月に公表された．その概要は，①対象：男性 203,904 人（観察人年 222.7 万人），②平均観察機関：10.9 年，③死亡数：14,224 人，うちガン死亡 5,711 人（肺がん 1208 人，肝がん 938），④平均累積線量：13.3mSv，⑤全ガンの標準化死亡比：1.04，肝・肺がん：1.13 および 1.08 と一般男性に比べて有意に増加である．これまで政府は 100mSv 以下の放射線被ばくのリスクはないかきわめて小さいといってきた．この報告書は，10mSv 程度の被ばくでも数%オーダーのがんリスクの増加があることを明確に立証している．ところが政府は，飲酒や喫煙などに原因があり，放射線被ばくとの関連を否定している．本論文では，これらの点を調べるために，肝がんと飲酒，肺がんと喫煙などの関連を詳細なデータに基づき検討している．検討の結果は，原発労働者の肝がん死亡率が一般国民より有意に高いことを飲酒習慣の違いで説明することは出来ず，また，原発労働者の肺がんと被ばく線量の関連が喫煙状態の交絡（confounding）によるという推論には困窮がない，であった．このことは，福島の子どものみならず大人についても速やかな避難や疎開の必要性を考える時がきていることを示しているのではないかと著者の松崎氏は警告している．（報告：M.K.）

（以上，三好記）

６．例会等の御案内

『日本の科学者』３月号 読書会

日　　時：2013 年 3 月 14 日（月）14:00～17:00
場　　所：ふくふくプラザ 604 室（福岡市中央区荒戸 3-3-39）
内　　容：『日本の科学者』３月号**＜特集＞福島原発災害，２年後のいま**

北九州分会　例会

日　　時：　3 月 22 日（金）18:00～20:00
場　　所：　（西小倉市民センターの会議室を予約予定）
内　　容：　「アベノミクス」を斬る～新自由主義から新福祉社会へ～（仮題）（報告：三輪俊和氏）

エネルギー研究会　(第 59 回)

日　　時：　3 月 23 日（土）14:00～17:00
場　　所：　(予定)　九州大学博多駅オフィス　(福岡市博多区博多駅中央街 1-1 JR 博多シティ 10F)
内　　容：「日本の科学者」2013 年 1 月号特集「国際原子力ムラ その虚像と実像」を読む予定。

『日本の科学者』４月号 読書会

日　　時：2013 年 4 月 8 日（月）14:00～17:00
場　　所：ふくふくプラザ 604 室（福岡市中央区荒戸 3-3-39）
内　　容：『日本の科学者』４月号**＜特集＞「いのち」の連鎖を考える**

（編集後記）このところ支部の会員数が増勢です。スバラシイ。（ＹＳ記）